

槇野産業株式会社

大正15年からつづく粉砕機メーカー
粘り強い開発姿勢とデータベースの活用で
顧客ニーズに応える



<http://www.mkn.co.jp/>



工場外観



代理店契約をしている Pelletron 社から贈られた盾を持つ社長の槇野利光氏

■会社の特徴

古くからの工業地帯として今も町工場が集まる葛飾区。その中でも長い歴史を誇る機械メーカーがある。粉砕機を主に扱う槇野産業株式会社だ。時代時代に合わせて、あらゆる素材の粉砕ニーズに応えてきた。これまでも、食品から金属、さらに粒子が細かいものではコピー機のトナー、珍しいものでは遺骨とあらゆる素材と利用目的にあわせた粉砕機を提供してきた。「粉は魔物」。粉砕時に想定できないような挙動を示す素材に対し機種選定をし、粘り強く回転盤やコマの材質、回転速度などを細かに調整し対応してきた。その姿勢に古くからの顧客に加え、いまま新規の問い合わせが引きも切らないという。

■会社の歴史

同社は、大正15年に槇野鉄工所として創業された。主力製品であるマキノ式粉砕機は、第二次世界大戦後の食糧危機の際に、政府の食糧対策の一環として1万台以上が生産された。その設計図は他社にも公開されたことで、日本の食糧事情の改善に大きく貢献する。現在では、自社製造の機械に加え、海外メーカーの製品も扱うことで、粉に関するあらゆるニーズに応えている。

■社長紹介

現社長の槇野利光氏は3代目である。工学部の出身で繊維機械の研究を行い、卒業後はアパレル企業に入社している。結婚を機に同社に入社すると、工学のバックグラウンドを活かし、新製品の製造、開発を積極的に行った。さらに自ら海外の提携先を開拓し、代理店契約を結び、日本にまだない機械を国内に紹介していく。取扱製品の幅が広がり、



粉砕機の一つ「イクシードミル」



戦後もなく納品した機械も消耗品を交換することで現役で活躍している



千葉県千葉市にあるテスト工場外観



テスト工場内部

粉砕の槇野産業から、粉体の混合、選別も手掛ける粉体のスペシャリスト企業へと大きく脱皮させた。

■製品の特徴

物体を粉砕するには主として3つの力が利用される。衝撃力、せん断力、磨砕力である。同社の機械においてもいずれの力も利用しているが、その中でも衝撃力の活用の特徴があるという。衝撃力は一度の衝撃で物体をある程度粉砕できるため、他の力に比べて時間をかけずに粉にでき、粉体の大量生産ニーズに合致する。

また、長い歴史をもつ同社だが、同社が納入している機械も長い耐用年数を誇っている。戦前に納品した機械がいまだに現役で動いていることも珍しくない。歯やハンマー部分などの消耗品を取り換えることで、古い機械も再び息を吹き返す。消耗品部分は互換性のある設計となっているため、いまだに部品の供給が可能だという。

■同社の強み

同社の機械は顧客のニーズに合わせて細かな仕様確認の後に納品されることが多い。千葉県千葉市にはテスト工場があり、各種テスト機械が設置されている。まずは顧客から提供される素材で粉砕等の試作を行う。その結果を基に顧客と打合せをし最適な機種と仕様を決定する。

これらの試験結果は、30年以上も前からデータベース化の仕組みが構築され、ノウハウとして蓄積されている。粘り強く顧客ニーズに応える姿勢に加え、その過程で得られた膨大な粉砕加工のデータを活用することで、あらゆる素材・粒度の粉砕ニーズに応えることができる。



導入されたばかりのマシニングセンター



納品された部品の検品を行う従業員



顧客からの問い合わせに応える営業部隊



CADを活用する設計部隊



組立を待つ粉砕機のボディ

レコード番号 (半角数字で記入して下さい) :

検索条件

テスト日 03.5.26 天候 F 湿度 20 温度 50 カードNo.2115-1
 品名 粉末材料 形状 球形 材質
 規格 DO-2 規格比率 0.22

検索履歴 mesh
 検索履歴 %

本数rpm	スクリーン	製品規格	30	16	7
3000	3	Date No.1	40.2	09.2	100
3000	5	Date No.2	43.2	78.2	99.9
		Date No.3			
		Date No.4			
		Date No.5			
		Date No.6			

同社ホームページから検索できるテストデータの一例



社長の榎野利光氏と事業承継を予定している常務の雄平氏



同社の歴史を感じさせる戦中の工場内の様子

■製造現場の特徴

同社の製造工程は、大きく部品工程と組立工程に分かれている。組立工程においては、一人の職人が納品前の性能検査まで担当する方式をとっている。定期的に新卒を迎え入れている同社にとって、若手従業員の育成は重要な課題である。熟練従業員からのマンツーマンの指導に加え、製品ごとにマイスター制度を導入することで若手従業員のやる気を刺激し技能承継を進め、技術力を維持・向上させている。若手従業員の成長は、組織全体の活性化にもつながる。

■同社の強み

同社には新規も含めて毎月数十件の問い合わせがある。その多くは、ホームページを通じたものだ。同社のホームページの導入は早く、18年ほど前には開設されていたため、「粉砕」等キーワード検索を行った際に上位に表示される。加えて、ホームページに記載されている粉体加工のデータベースも引き合いのきっかけだ。「粉体加工は条件が少し変わるだけで素材の挙動が変わってしまうため、詳細な情報は出せない。それがあって、問い合わせにつながっているようだ」と榎野社長は語る。

新しく取り組んでいる粉体の混合についても、大学教授に協力し実験結果を公表したことで、取引につながったこともあるという。

情報の蓄積と効果的な公開により、受注のきっかけをつかんでいるのだ。

■組織づくり

榎野社長は、「会社の目的は、利益を出すことではない」と強く言い切る。「会社は従業員が幸せになるための場所である。従業員を幸せにするために分配が必要で、そのた

めに利益を出さなければならない」と語る。すなわち、利益は目的ではなく手段だ。

従業員の幸せを考える榎野社長の組織運営は柔軟である。かつて、小さな子どもの預け先がなく困っていた従業員に対し、「それなら、会社に連れて来ればいい」と解決策を提示したこともあった。「当社はゆるくてぬるい会社だ」と社長は笑う。

その一方で、従業員の経営参画意識の向上に取り組む。全従業員参加の会議を毎月開催し、会社の売上げや利益、受注状況、製造工程で発生したトラブルや損失などもつまびらかに共有する。従業員は会議を通じ、給与は会社から支給されているのではなく、満足してくれた顧客からの入金が自分の給与になっていることが実感できる。その気づきで従業員の働きが変わる。目的意識を共有することで強い組織づくりを実現しているのだ。

■会社の将来

これからの同社について事業承継を予定している常務の雄平氏に尋ねた。「これまで、技術者で経験も豊富な現社長のリーダーシップが会社を率いてきた。私自身は文系の出身で技術的なバックグラウンドは持たない。自身の足りないところは従業員に補充してもらいながら、みんなで知恵を出し合い考えていく。社長としてかじ取りしつつ、組織としての強さをより高めたい」。時代の要請に応じて、様々な素材の粉体加工を実現してきた同社である。これからも従業員の力を結集し、蓄積してきた粉体加工のデータベースを活用することで、素材の再利用など時代の新しいニーズに応えていくことだろう。